（八）四箇格言

私達日蓮宗檀信徒は是非知っておきたいことです。日蓮聖人は末法の世に法華経を弘める者は必ず受けると云う迫害の数々を耐え忍んでこられました。

法華経勧持品第十三に、法華経の行者に対する圧迫、非難、攻撃が加えられたことが後段詩偈二十句がそれであります。

日蓮聖人は数々の迫害法難という最悪の苦難に遇われたとき、釈尊の説かれる法華経勧持品の詩偈の一つ一つに電撃的共感を得られ、一句の教えに支えられて、どれだけ弘法へ勇氣凛然の力を得られたことか、そして釈尊の説かれた法華経の重みをもって受持されたことかと涙を禁じ得ません。法華経をいただく者の感動でございます。

「我不愛身命　但惜無上道　我等於来世　護持佛所嘱」

法華経を弘めんとする日蓮聖人は、そのために迫害され追放され流罪に処せられようとする。「中国の天台大師も、日本の伝教大師最澄も法華経を弘めようとしたが迫害には会わなかった。日蓮ただひとりである。これこそ日蓮がほんとうの法華経の行者であり釈尊の使徒である」と確信するのでした。この確信と信念はご生涯を堅固に支えたものです。私達は、此処へ到達せねばと心に念じるものです。

日蓮聖人の波木井殿御書にこのようにあります。「我身命を愛まざる法門なれば命を捨てて此の法華経を弘めて日本国の衆生を成佛せしめん」とねがったものであります。

「日蓮一人、阿弥陀佛は無間の業因、禅宗は天魔の所爲、真言は亡国の悪法、律宗は国賊也と申と故に、早く浄土宗を捨て法華経を持ち生死を離れて菩提を得べき事」云々と申されるなどですが、これをまとめて「一に念佛無間、二に禅天魔、三に真言亡国、四に律国賊なり」これが四箇格言と云われているのです。

蓋し此の格言は、皆便宜に従って語を立てたもので、**○念佛無間**とは、教主釈尊を捨て他人なる阿

弥陀佛を信ずる故に五逆罪の咎に依りて必ず無間大城に墮つべきなり」と、また**○禅天魔**とは、行敏訴状御会通に「禅宗は天魔波旬（殺者パーピーマン。人の命や善眼を断つ悪魔）の説と云云、此又日蓮が私の言に非らず、彼の宗の人人の云はく教外別伝と云云。佛の遺言に云はく、我が経の外に正法ありといはゞ天魔の説なり云云。教外別伝の言、豈に此の科を脱せんや」と云はく。**○真言亡国**とは「證文何なる經論に出づる也」答「法華経誹謗正法向脊の故なり」問ふ「亡国の證文之無くば云何に信ずべきや」答ふ「謗法の段は勿論なるが、若し謗法ならば亡国、墮地獄疑いなし、凡そ謗法とは謗佛謗僧なり、三宝一体なる故なり、これ涅槃經の文なり、爰を以て法華經には則断一切世間佛種と説く。これを一闡と名づく、涅槃經の一を十と十一とを委細に見るべきなり」と云い、釈迦、大日二佛の一世にあるべきことなし等の真言七重の難を説き、更に大論の九に云はく、十方恒河沙の三千大千世界を名づけて一佛世界と為す、是の中にさらに余佛なく、実には一の釈迦牟尼佛なり。次に**○律国賊**とは、下山御消息に「今の律宗の法師原は世間の人人には、持戒実語の者也。其の故は、彼らが本文とする四分律十誦律等の文は大小乗の中には一向小乗、小乗の中にも最下の小律也。……佛の記し給ふ阿羅漢に似たる闡提是也。と云い、是れ即ち律宗の徒が自ら国宝を以て任ずるに対して却て之を国賊の流なりと評したるなり」。と仰せられ記すところで大方四箇の格言の本意と釈尊に帰すべきこと、法華經に帰依の正道を示されたものと理解するものです。

（九）　南部弥六郎殿について

遠野南部家は八戸から移って以来、盛岡に居住し現在の内丸北ホテルの位置にお屋敷を賜っていた。

ある歳天下の諸侯が将軍家のお伴をして宮中に参内することになったが生憎盛岡南部家の当主は病いを得ていて供奉できなかった。替りに遠野南部弥六郎殿が名代で参内した。時は秋で天候不順な歳